様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６５２

研究課題名（和文）日本社会を対象とした「異・多文化共生尺度」開発

研究課題名（英文）Development of "Multicultural Inter personal Competence scale" for the Japanese society

研究代表者
稲垣　亮子（Inagaki, Ryoko）

愛知淑徳大学・公私立大学の部局等・助教

研究者番号：００５４９３８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　多文化状況下で一般市民に求められる集団間調和，包摂的対処への資質を「多文化対人コンピテンス」と定義し，これを測定する尺度の開発を行った。因子分析の結果，「融和的コミュニケーション（MCICⅠ）」「日本文化・習慣の手引き（MCICⅡ）」「異文化への共感的理解（MCICⅢ）」の３因子構造を得た。各下位尺度において性差と外国人カテゴリ間の差を検証した結果，MCICⅢでのみ，男性より女性の方が高かった。またMCICⅡのみ，ホスト社会の文化や社会規範の伝達力を低く評価した。
　MCICの各下位尺度と特性的自己効力感，社会的距離，異文化接触経験の間で相関係数を算出した結果，MCIC尺度の妥当性が示された。

研究成果の概要（英文）：I defined the harmony between groups demanded from a citizen under the multi-cultural situation, the nature to coping of subsuming it as "Multicultural Inter personal Competence". And I inspected the development of the scale to measure this and reliability, the validity. As a result of factor analysis, I got 3 factor structure:"conciliatory communication(MCICⅠ)" "guide of Japanese culture, the custom(MCICⅡ)" "consensual understanding to cultures(MCICⅢ)".
 In each scale of the MCIC, I inspected sex differences and the difference between foreign categories. As a result, meaningful sex differences were seen only in MCICⅠ. In addition, only in MCICⅡ, the meaningful main effect was seen in a foreign category. For inspection of the construct validity, I calculated a coefficient of correlation of Pearson between MCIC scale and a self-efficacy scale, a sociological distance scale, cross-cultural contact experience scale. As a result, the validity of the MCIC scale was shown.

研究分野：社会心理学

キーワード：多文化対人コンピテンス

１．研究開始当初の背景

留学生 10 万人計画や入管法の改正に平行し、これまで異文化滞在者、つまり、ゲスト側に対する異文化社会への適応に関する多くの研究や支援が行われてきた。その間、外国人の受け入れに関する国と自治体の責務が明確化され、社会支援システムが構築されている。少子・高齢化が進むホスト国である日本にとって不可欠である外国人労働力の移動と彼／彼女らの生活の移動とを切り離して考えることはできない。就労目的で渡日した外国人は、当初「顔の見えない、囲われた」定住者と呼ばれていた。しかし、滞在の長期化に伴って、日本で家族を形成したり、子どもが教育を受けたり、ホスト市民と同様に地域社会で彼／彼女らの生活を送っており、共存の形態も多様化している。以上のように、現在の日本に遍在化している多文化共存下では、ホスト市民の側もゲスト市民から多様な価値の影響を受ける。すなわち、外国人住民の異文化適応だけではなく、ホスト住民もまた、異文化に対する認知の再体制化を求められており、社会支援システムの構築にもホスト市民の多文化共生に対する認識は不可欠である。しかし、現在急速に加速する多文化共生社会におけるホスト側、つまり、日本人を対象とした対応に関する研究は非常に乏しい。

２．研究の目的

米国の研究では、多文化間カウンセラーに求められる能力として「多文化コンピテンス（Multicultural Competence：MC）」が提出され、尺度開発も行われている。しかし、これを一般の市民に適用するのは困難である。本研究では、多文化状況下で一般市民に求められる集団間調和、包摂的対処への資質を「多文化対人コンピテンス」と定義し、これを測定する尺度を開発し、その信頼性・妥当性の検証を行うことを目的とした。そして、ホスト側の多文化共生社会に対する心理的態度の課題を顕在化した。

３．研究の方法

第一に「多文化対人コンピテンス」尺度開発のため、国内の大学に通う日本人大学生 447 人を象者とした予備調査を行った。予備調査の質問項目は以下のとおりであった。(a) 多文化対人コンピテンス（MCIC）尺度：MC を測定する尺度開発を行った米国の研究、および、留学生や日本人の支援に関する研究を項目化した 31 項目（5 件方）。教示内容は「日本で生活する外国人を想定した接触行動の程度」としたが、「外国人」からイメージされる個人の差異を考慮し、「外国人一般」「アジア」「欧米」「南米」系外国人の 4 種類を作成した。(b) 特性的自己効力感尺度の 23 項目（5 件法）。(c) 社会的距離尺度の 4 項目（5 件法）。得点が高くなるほど不寛容を表す。異文化接触経験：「顔を合わせたときにあいさつをする」などを尋ねる 6 項目（4 件法）。

第二に、定住外国人が利用する「多文化共生社会支援教室」外国人を雇用する「企業」外国人の「集住地域」「非集住地域」４つの対象集団に属する日本人に対して質問紙調査を行った。

４．研究成果

多文化状況下で一般市民に求められる集団間調和、包摂的対処への資質を「多文化対人コンピテンス（Multicultural Interpersonal Competence：MCIC）」と定義し、これを測定する尺度の開発と信頼性、妥当性の検証を行った。因子分析の結果、３因子構造を得た。第Ⅰ因子は「気軽に話す」「自分のいいたいことを落ち着いて伝えることができる」「外国人同士の仲間やグループに親しく話しかける」「自分から心の壁を取り除いて、話しかけたりする」「自分のことを伝えたい気持ちをすすんで話す」をはじめとする 12 項目から構成されていた。この因子は、対人関係において相手との距離を縮められること、良好な人間関係を開始し、その関係の維持を試みることができる項目から構成されていた。したがって、積極的なコミュニケーションによる関与を反映していると判断し、「融和的コミュニケーション（MCICⅠ：α=.90）」と命名した。第Ⅱ因子は「日本の習慣として、周囲の人に従わないと浮いてしまうことがあることをアドバイスする」「断るときは相手を傷つけないように、はっきりと言わない方が良い場合があることを教える」「自己主張を控えた方が良い場合があることをアドバイスする」「『謙遜』した方が好意的に受け入れられる場合があることをアドバイスする」「日本の習慣として、言葉に出して言ったことと、心の中で思っていることが違う場合があることをアドバイスする」をはじめとする 9 項目から構成されていた。この因子は、日本社会下で内在化された文化的規範や待遇行動を自覚しており、その文化的行動様式を外国人に伝える行動によって相互作用を生起させることを可能にすると解釈できる項目から構成されていた。したがって、第Ⅱ因子は「日本文化・習慣の手引き（MCICⅡ：α=.90」であると判断した。第Ⅲ因子は「日本の文化を再確認するために、相手の文化や習慣について積極的に知識を得ようとする」「相手の国の文化や習慣、人間関係のマナーについての知識を積極的に得る」「日本社会の習慣やマナーなど、日常的なことから日本の文化について話す」「外国人が理解できるように普段の自分の話し方のスピードを変える」「日本の生活に慣れていないようだったら、近所を案内したり買い物などに付き合ったりする」をはじめとする 6 項目から構成されていた。この因子は、文化間の差異の存在に対して気づきと知識をもっており、その認識に従って行動すること

ができると解釈が可能な項目から構成されていた。したがって、「異文化への共感的理解（MCICⅢ：α=.77）」であると判断した。

MCIC 尺度の各下位尺度において性差と教示で用いた外国人カテゴリ間の差を検証した（表 1）。その結果、MCICⅢ（男性：M=3.37、SD =0.61、女性：M =3.61、SD =0.71）でのみ有意な性差がみられた（t（445）=2.19、p <.05）。また、MCICⅡのみ、外国人カテゴリに有意な主効果がみられた（F(3、442)=5.52、p <.01）。多重比較の結果，特定の国を想定しない外国人一般と欧米系外国人カテゴリとの間に有意な差が認められた。すなわち，コンピテンスの対象と成る外国人カテゴリが具体化されたことによって自文化の習慣や規範を伝達する対応が抑制される結果が示された。以上の結果から、異文化への知識、文化差に対する客観視や対人関係維持力の資質の点で、男性より女性の方が高かった。また、ゲストの出身地域を限定しない場合に比べ、カテゴリが具体化されたとき、ホスト社会の文化や社会規範の伝達力を低く評価した。

構成概念妥当性の検証のため、MCIC の各下位尺度と特性的自己効力感尺度、社会的距離尺度、異文化接触経験の間で Pearson の相関係数を算出した（表 2）。MCIC と「課題場面」と「対人場面」の特性的自己効力感との相関係数を求めた結果、すべての多文化間コンピテンスと特性的自己効力感の各因子の下位尺度得点間に有意な相互相関が示された。まず、MCICⅠ積極的コミュニケーション関与は、課題場面（r=.33、p<.001）と対人場面（r=.41、p<.001）、MCICⅡは、課題場面（r=.14、p<.01）と対人場面（r=.16、p<.01）、MCICⅢは、課題場面（r=.25、p<.001）と対人場面（r=.22、p<.001）間にそれぞれ有意な正の相関が示された。したがって、多文化対人コンピテンスと遂行行動の達成感である特性的自己効力間の各場面において相互関連が認められた。MCIC と外国人に対する抵抗感である社会的距離との相関係数を求めた結果、MCICⅠと社会的距離（r=-.32、p<.001）、MCICⅢ（r=-.24、p<.001）との間に有意な負の相関が認められた。したがって、両コンピテンスと多文化共生社会への抵抗感とは、相反する関係であることが示される結果となった。しかし、日本文化・習慣の手引きとの相関は示されなかった。

MCIC と多文化共生社会に対する統合・共生志向と同化志向との相関係数を求めた結果、まず、MCICⅠと統合・共生志向（r=-.20、p<.001）、MCICⅢ（r=-.29、p<.001）との間に正の相関が示された。また、MCICⅡと同化志向（r=-.14、p<.01）との間に正の相関が認められた。したがって、MCICⅠおよび、MCICⅢと多文化共生社会に対する態度の間には、共生社会におけるホスト住民としての係わり合い、あるいは共存への理解が示されていた。その一方で、ゲスト住民に求める日本的行動様式への期待とゲスト住民の文化習慣、文化的規範を重要視しない態度との相互関連も僅かながら認められた。

MCIC と異文化接触経験との相関関係を求めた結果、MCICⅠ（r=.39、p<.001）、MCICⅡ（r=.17、p<.001）、MCICⅢ（r=.30、p<.001）の全ての因子と異文化接触経験と関連が示された。したがって、因子の性質に関わらず、コンピテンスと異文化接触経験とは相互関連が認められた。以上の結果より、MCIC 尺度の妥当性が示された。

表 1　MCIC 尺度における性差・外国人カテゴリ別平均値

	性別		外国人カテゴリ			
MCIC因子	男性	女性	外国人一般	欧米	アジア	南米
FⅠ	2.95 (0.78)	3.04 (0.74)	3.09 (0.66)	3.01 (0.72)	3.00 (0.77)	3.04 (0.77)
FⅡ	2.90 (0.68)	2.75 (0.81)	3.01 (0.73)	2.60 (0.80)	2.73 (0.85)	2.76 (0.75)
FⅢ	3.37 (0.61)	3.61 (0.71)	3.68 (0.67)	3.54 (0.73)	3.57 (0.72)	3.55 (0.72)

( )内は標準偏差

表 2　MCIC 尺度と外部基準変数の相関行列

MCIC因子	SE		社会的距離	接触経験
	課題	対人		
Ⅰ:融和的コミュニケーション	.33 ***	.41 ***	-.32 ***	.39 ***
Ⅱ:日本文化・習慣の手引き	.14 **	.16 **	.00	.17 ***
Ⅲ:異文化への共感的理解	.25 ***	.22 ***	-.24 ***	.30 ***

**: p <.01　　***: p <.001

同尺度を用いて「日本語、多文化共生支援教室」「外国人雇用企業」「外国人集住地域」「同非集住地域」のホスト市民を対象とした調査によって、5 項目から構成される 4 つの問題点が顕在化された。(1) 外国人カテゴリに対するステレオタイプの示唆：多文化共生社会への動機づけが最も高いことが予測された「日本語・多文化共生支援教室」において支援対象である外国人の出身国/地域によって、「融和的コミュニケーション（MCIC 第Ⅰ因子、以下 MCICⅠ）」「日本文化・習慣の手引き（MCICⅡ）」「異文化への共感的理解（MCICⅢ）」の下位尺度に有意差が示された。この傾向は、予備調査を含む 878 名の大学生を対象とした調査でも一貫して認められた。(2) 集住地域における多文化共生態度の多面性：集住地域では、非集住地域に比べ「MCICⅠ」「接触経験」が高い一方で、外国人に対する抵抗感が高いという両価性、「MCICⅠ」「MCICⅡ」と「統合」「同化」の両志向、及び、抵抗感の低さに関連が認められた。以上の有意差は非集住地域では認められなかった。(3) 企業における共生社会への多様性：企業の日本人従業員では、集住地域で示された関連が認められなかった一方で、「不可欠

な労働力／雇用を望まない」といった「ポジティブ／ネガティブ態度」の内、ポジティブ態度は全因子と、各態度、両志向と抵抗感とが、それぞれ正／負に相互関連していた。この相関は集住地域では示されていなかった。（4）各フィールドと大学生におけるコンピテンスと共生社会態度の差。（5）集住地域と企業における共生態度とコンピテンスの年代差：集住地域では、20 歳代に比べ 50 歳代の「同化」志向が、企業では、40＞50＞60 歳代の順で「MCICⅡ」が高く示された。
以上の結果から今後の課題は以下のとおりである。①異文化接触の際に生じる感情や態度である個人特性と多文化共生社会への動機づけの関連である。動機づけはコンピテンスの要素でもある。そこで、個人特性と動機づけに影響を及ぼし、かつ、異文化理解、向文化的多様性の要因である曖昧さ耐性、社会・文化的アイデンティティの複雑性、寛容さ、文化本質主義と MCIC との関連を検証する必要があると考える。②その後、検証された要因を含む異文化シミュレーション・ゲームを実施して実験参加者のパフォーマンスを MCIC 尺度とセルフ・モニタリング尺度等を用いて評価し、MCIC 尺度の効果測度としての適用可能性を検証することが必要であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）
1.多文化共生社会における「こころ」の問題へのアプローチ　－ホスト市民を対象とした「多文化間コンピテンス尺度」作成と顕在測度を用いた妥当性の検証－
稲垣亮子　「言語文化」21 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会（査読なし）18-32（2013）

2.「多文化間コンピテンス尺度」作成のための予備調査　－結果報告を中心に－
稲垣亮子　「人間文化研究」18 名古屋市立大学大学院人間文化研究科（査読あり）193-212（2012）

3. 日本社会における「多文化間コンピテンス」尺度開発に関する研究ノート　－コンピテンスの領域と構成概念妥当性の検討の観点から－
稲垣亮子「愛知淑徳大学論集」2 交流文化学部篇　（査読なし）33-51（2012）

4. 多文化が共存する社会の進行　－ホスト社会におけるこころの対応への検討－
稲垣亮子　「人間文化研究」16 名古屋市立大学大学院人間文化研究科　（査読あり）103-117（2011）

〔学会発表〕（計　５　件）
1. 一般市民を対象とした多文化対人コンピテンス尺度の作成　－多文化対人コンピテンスに関する実証的研究（1）－
稲垣亮子　久保田健市　日本教育心理学会第 55 回総会　法政大学市ヶ谷キャンパス（東京）（2013 年 8 月 17 日）

2. 多文化対人コンピテンスと国家および多文化共生に対する態度との関連性　－多文化対人コンピテンスに関する実証的研究（2）－
久保田健市　稲垣亮子　金　愛慶
日本教育心理学会　第 55 回総会　法政大学市ヶ谷キャンパス（東京）（2013 年 8 月 17 日）

3.「多文化間コンピテンス尺度」の作成　－ホスト社会市民の心理的問題へのアプローチ－
稲垣亮子　「こころ」の発達に関する研究セミナー名古屋市立大学山の畑キャンパス（愛知県）（2013 年 1 月 30 日）

4. 多文化共生社会の「こころ」の対応　－日本社会における「多文化間コンピテンス尺度」の開発　尺度項目の検討の観点から－
稲垣亮子　2012 年度　日本語教育国際研究大会　名古屋大学（愛知県）（2012 年 8 月 19 日）

5. 多文化共生社会におけるこころの対応　－多文化間コンピテンス尺度開発に関する中間報告－
稲垣亮子　「こころ」の発達に関する研究セミナー　名古屋市立大学山の畑キャンパス（愛知県）（2012 年 2 月 28 日）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
稲垣　亮子（INAGAKI,　Ryoko）
愛知淑徳大学・教育部門･センター・助教
研究者番号：００５４９３８９